



龍族

RYUZOKU

第 13 号

 南天会
 平成 30 年
 9 月 24 日

インドの希望の道

小池一郎

私が佐々井上人を知ったのは、山際素男先生の著書『不可触民の道』でした。1981年、浪人の末に入った大学で、このまますすんで社会に出ていいんだろうか？と酒を酌み交わし議論した友人と休学し、1982年、インドは

カルカッタ（コルカタ）からバックパッカーを始めました。8月に入る頃、暑さを逃れて過ごしていた山岳リゾートのマ



ナリーで、今度は、このまま旅を続けていていいんだろうか？との疑問から友人と別れて、佐々井上人を訪ねるべく、ナグプールに向かったのです。当時、アーナンダ寺にみえた佐々井上人は、突然訪ねた私を「いつまでいても良い」と、寺に泊めてくださいました。私は、ぜひここに長くいたいと思い、しかし何もしない居候は申し訳ないので、小僧としておいてくださいと願い出ました。それもすすなりと受け入れていただき、得度して黄衣を賜り、「マエトリカラム（友愛業）」という法名で約3か月間、沙弥の生活を送ることになったのです。当時の佐々井上人の生活は、ひたすら法事の日々でした。パリットランパートと

ンベードカル博士の絵を置いて花で飾り、ロウソクと線香を用意します）を作りま

す。そこで佐々井さんの1時間のパリリ語の読経があり、その後、1時間の説法があるのです。私も必死になって読経しましたが、狭くて暑くて毎回汗がとめどなく出ます。これが毎日3回くらいあります。佐々井さんのスケジュールはこのパリットランパートの予約で埋め尽くされています。民衆がどんな日程を埋めていつてしまうのです！

ひたすらこうした日々が続いているのか。これが修行（菩薩行）なのか。私は、夜、何度も佐々井上人のお部屋で、いろいろな経験談やお考えを聞きました。「何

年もこのようにされているんですか？」「焦らずせかず、春の海、ひねもすのたり、のたりかな、と唱えるんですよ」と一笑されます。民衆のための捨身の業とは、恐ろしく地味であること自体に凄みを感じました。

日本に帰って復学し、インド仏教を紹介する機関紙「ナーガ」を発行したことで、全国の佐々井上人の支援者の方々に出会えました。特に、佐々井上人の最大の理解者である神戸の富士玄峰師には、本当にお世話になりました。在学中は、ほとんどの夏休みや冬休みを使ってナグプールを訪れ、成田空港に行く前によく山際素男先生のお宅に泊めていただきました。奥様のカレーをいただきながら、先生のお好きなウイスキーで遅くまで議論したことで、インドに対する私の理解も深まりました。お亡くなりになり、大変残念です。

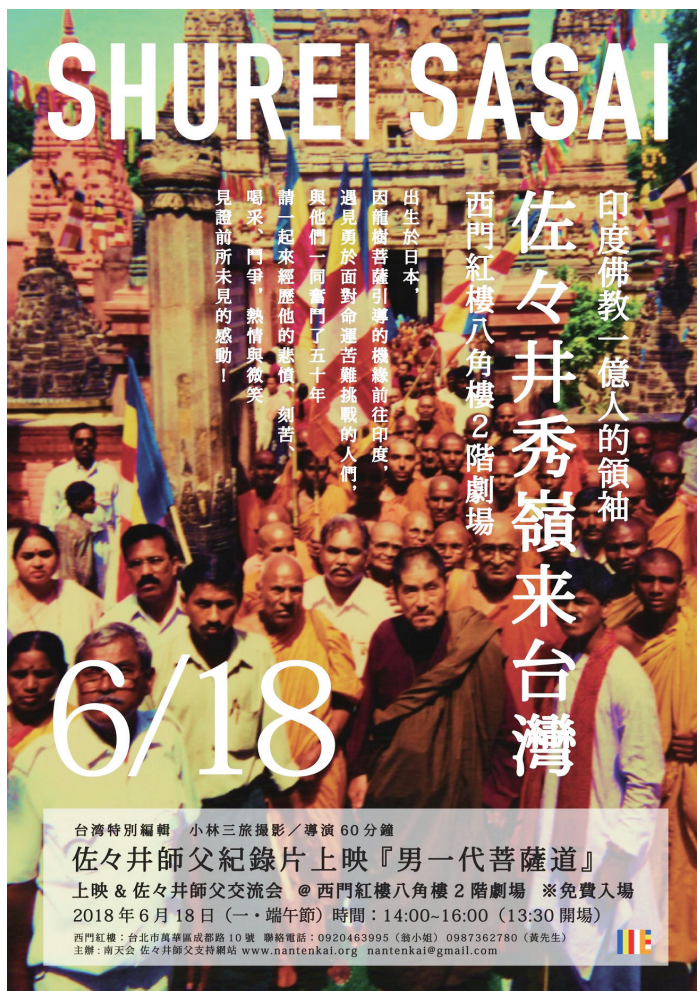
インドには闇があります。佐々井上人も山際先生も指摘されております。インド人の心を、この闇から解放できるのは仏教しかないのではないかと。差別や暴力は、行う側の心をも恐怖で覆っているのではないかと。

アンベードカル博士が苦悶の末に辿り着いた仏教は、インドの希望になると信じています。仏教の本領は心の病院です。佐々井上人の活動はやがて、インドを救う道になるでしょう。



佐々井秀嶺來台

佐伯隆快



「台湾には一度行ってみたいと思って
いたんだ。」

近年、仏跡を訪れる外国人で最も目
立っているのが台湾からの参拝者で、観
光旅行とは違う敬虔な巡礼の姿に信仰の
篤実さがうかがえる。ナグプールを訪れ
る人も見受けられ、多額の寄付をする仏
教徒もあるという。台湾仏教会ではアン

ベードカル博士の『ブッダとそのダンマ』
を中国語訳し無料配布をするなど、イン
ド仏教との接点も増しつつある。また
ま私（佐伯）がよく台湾に行っていると
いうことで、今回の来日期間中にバン
テージを台湾にお連れしようというこ
とになった。またたいま最重要の課題
であるブッダガヤ大菩提寺返還運動につ

いて、台湾でも大いにアピールして国際
的な関心を高めたいというバンテージ
の希望もあった。更には、台湾仏教との
交流のため台湾四大本山の一つ「慈濟
（ツーチー）」を訪問し、その活動を認識
して台湾のマザーテレサと言われる證嚴
上人との面会も調整していた。

実は私の祖父にあたる長命密寺先住職
佐伯憲秀師は、日本の台湾統治時代に東
部花蓮の日本人移民村の高野山布教所に
生まれ12歳まで台湾で過ごした人で、そ
の布教所、現在の吉安慶修院は台湾国家
3級史跡に指定され修復工事が行われて、
花蓮市の歴史的建造物として毎年様々な
行事を行っている。私は祖父の關係で10
年以上前から花蓮に通っていた。そこで
お世話になっている花蓮縣青少年公益組
織協会の黄榮墩さんと翁純敏さんに、今
回の佐々井上人台湾行の協力をお願いし
たのであった。

またもう一人の南天会事務局小林三旅
さんと佐々井秀嶺資料室の世話人でもあ
る小山奈々子さんも台湾で度々イベント
を開催していて、台北での上映会&交流
会開催に当たり、そのカウンターパート
ナーである Amy Chen さんにも大
いに協力いただいた。

6月14日から19日、多くの人々の協力
により「佐々井秀嶺來台」が決行され
たのである。

6月14日



バンテージと私、随身の位田さんは
岡山空港からタイガーエア（台湾虎航）
で台北へ。先着していた三旅さん小山さ
ん山本宗補さんたちと合流。台湾側は黄
さん翁さん、通訳をお願いした李道道さ
ん、Amy さん一家。印日台の人々打ち
揃い、鼎泰豊で野菜餃子を囲んだ。それ
ぞれの縁でつながった人々であるが、す
でに不思議な熱気に包まれている。みん
なで拳を上げて、
ジャイビーム！

6月15日

午前中、台北市内の臨濟護国禪寺に参

拝。日本統治時代、臨済宗妙心寺派の台湾別院として建てられた寺で、台湾総督児玉源太郎を開基とする。日本建築の法堂が保存され市の古跡に指定されている。台北市内にはいわゆる植民地布教を目的とした日本各宗の別院が建設された。光復後様々な変遷をたどりながらも現在もその遺構が多く残っている。ここに Amy さんのお母さんの遺骨が祀られており、バンテージは納骨堂で真剣なる読経を捧げた。

午後、台北駅から特急に乗り花蓮へ。ちょうど端午節の連休と重なり、花蓮行きの切符は入手難な状況だったが、翁さんが手を尽くして 10 名分もの切符を用意してくれた。花蓮到着後、市内の慈濟本部静思堂を参拝。ここで京都産業大学の志賀浄邦さんが合流。

慈濟は世界最大の仏教ボランティア組織と言われている。一人の尼僧が 20 人の主婦と始めた東部台湾の貧しい民衆を助ける慈善活動が大きく発展し、今や全世界に支部を持ち 400 万人のボランティアが登録され、自然災害や疫病、環境破壊などの苦難に救いの手を差し延べている。

慈濟に代表される現代台湾仏教は、中国仏教の変革者、太虚法師（1890～1947）が提唱した「人間仏教」という理念を継承している。人々の間に入っていく仏教、社会に関わる仏教という意



味の人間仏教。戦争の時代、人々の苦しみの中に仏教を投入した太虚法師。同時代人であるアンベードカル博士もまた民衆の苦しみを救う道として仏教を選んだ。その仏教認識には通底するものがある。また日本で戦争に抗して立ち上がった新興仏教青年同盟の妹尾義郎氏も、体制に追従する日本仏教の激烈な批判者として「仏陀を背負いて街頭へ、農村へ」を合言葉に、人間仏教を模索した。いわば太虚法師の弟子の印順導師を師と仰ぐ慈濟創始者の證嚴上人と、新興仏教に参加した山本秀順老師を師と仰ぎ、アンベードカル博士の後継者と目される佐々

井上人は、同じ法脈を継ぐ仏教者であると言える。エンゲイジドブuddiズム（社会参画仏教）の研究で、両者に注目してきた志賀さんからのアドバイスもあり、佐々井上人と證嚴上人の邂逅という歴史的な場面を想像し、台湾の人たちと連絡して面会の実現を目指して準備してきた。静思堂では、慈濟のボランティア活動について詳細な説明を受けた。台湾中部地震、四川地震、ニューオーリンズのハリケーン被害、スマトラ沖地震大津波、東日本大震災など世界中の災害に緊急支援を行い、発展開発国でのごみのリサイクル運動や、アフリカでの HIV 患者支援、難民キャンプでの食料医療支援など、迅速かつ大規模なボランティア活動を展開する慈濟の人たちの様子に目を見張るばかりであった。

花蓮では、明日法要が行われる慶修院近くの珮光民宿にお世話になった。ここは黄さん翁さんの友人の沈さん姉弟が経営する新しい民宿で、宿泊食事など我々全員の滞在を無償で提供していただいた。ありがたし。

6月16日

この日は、私が企画案内した都合で祖父の生まれたお寺吉安慶修院の青葉まつり（弘法大師空海の生誕祭）にバンテージにご参列いただくことになっていた。そして実は台湾到着の 5 日前の 6 月 9 日、

この地に生まれた私の祖父の佐伯憲秀師は広島で 95 歳の生涯を閉じた。11 日の葬儀にはバンテージ、位田さんにも参列いただき、黄さん翁さんから献花もいただいた。バンテージの来日スケジュールも変更になり、台湾行きもどうなるかと思っただが、祖父の生まれ故郷に報告するというところで予定通り花蓮までやってきたのであった。慶修院には祖父の分骨を納めさせていただき、朝早く一座の法会を執り行い、バンテージをはじめ皆様にも読経していただいた。祖父憲秀師は、2009 年の佐々井上人 44 年ぶりの帰国の折、岡山の山佐本陣での講演会を開きに行き、三旅さんの『男一代菩薩道』を読んで「わしもインドに行つて佐々井上人のお手伝いをし、お釈迦様と同じ土になりたい」と言っていた。私が度々インドに行ったり、南天会でいろいろと活動ができたのも、祖父からの支援のおかげであった。

慶修院は現在、花蓮縣文化局から委託されて騎脚酸休閒文化事業社という NPO が運営し、年中行事には日本から多くの人々が参拝して法要やイベントを開催している。慶修院スタッフの皆様、また日本から参列した方々と共に、この地の歴史に連なる人びとに供養の読経を上げさせていただく。

午後、郊外の新城郷にある慈濟の静思精舎へ、インドへの支援に関する話し合



いをしに行った。ここは證嚴上人が最初に庵を結んだところで、およそ80人と言われる慈済のお坊さん(ほとんどが尼僧)が生活する場所である。昨日の本部の壮大な建物とは違い、質素で清潔な木材を多く使用した建物が並ぶ。その一室で慈済の僧侶と代表者に面会し、佐々井上人の活動説明と特に大菩提寺返還運動に対する支援を要請した。

今回残念ながら證嚴上人との面会は適わなかった。目の治療中であるため、面会しても十分な話ができないということであった。

バンテージは、通訳の李さんを通じて大菩提寺返還運動について説明され、管理権を巡る裁判への支援をはっきりとお願いされた。この問題が人権問題であること、大菩提寺管理権返還が今なお貧しいインドの仏教徒への大きな支援となること、世界の仏教徒が同じく認識すべき問題であること、を説かれた。ところが慈済は主に災害や病氣、生活支援などに重点を置いており、裁判や政治問題には関与しないというのが證嚴上人の姿勢であり、裁判費用援助というのは難しいという回答であった。昨日の活動説明からもそういう様子はうかがえたし、またその姿勢は一貫したものであった。しかしインドの状況について、慈済は今まであまり関係して来なかったもので、わざわざ井上人ご自身が花蓮まで見えて、

お話をしていただいたことに非常に感謝しているという由の発言があり、慈済には慈済のできる支援をしていきたいとのことであった。

大菩提寺管理権の問題は、佐々井上人の重要なテーマである。わたしもそう認識して、いよいよ本格化する裁判に備え、パンフレットを作成したり資料を集めたりしてきたが、今回の台湾行でもここまでバンテージがこの問題をアピールされることに考えが至らず、ボランティアを基調とする慈済との折衝は少しミスマッチだったのかもしれない。スケジュールで、裁判支援をお願いするときあまり高額な金額を言うのと支援の出足が鈍ると思う、具体的な金額を言っただけで、その様子を見てバンテージはこう言われた。「おたくはまだ本当にブッダガヤの大菩提寺の問題を分かっている。俺はインドでも何年もこの問題に取り組んできたから、堂々と金額も言えるのだ。」なるほどそうかと思った。バンテージのその真剣さは、台湾の人々には伝わったのかもしれない。通訳をしてくれた李さんも、黄さん翁さんも本当に努力してくれたと思う。慈済での話し合いは、バンテージの希望には適わなかったが、皆真剣な気持ちを持ち寄った感じがした。静思精舎からの帰り道、黄さんが主宰する「家具銀行」の倉庫に立ち寄った。



花蓮は今年2月に大きな地震が発生した。死者こそ少なかったものの断層上の建物が多く破壊され、600人の市民が家を追われ、県が用意した臨時の住宅に避難している。そこで黄さんたち花蓮縣青少年公益組織協会は、台北で不要家具を集めてトラックで花蓮に運び、市内の倉庫を借りて被災者に無償提供する運動を開始した。黄さんたちの運動は「好人運動」といって、これまでも高齢化が進む農村の義買運動や、駅での荷物運搬補助など、様々なボランティア活動を展開し、台北に「好人会館」というオフィスを設置して、テレビなどでも取り上げら

れている。好人運動を担うのは主に学生で、若い人たちが率先してこのような活動を行う。職業経験にもなるし、すばらしい人脈ができる。若い人たちは皆佐々井上人に合掌して挨拶をする。晴れ晴れとした顔で、我々に冷たいパイナップルジュースを振舞ってくれた。

6月17日

台北から雨模様の天気が続いていたが、この日は少し晴れ間がのぞき太平洋の海風が雲を押し上げ、花蓮の高い山肌が現れた。志賀さんの生徒でこの8月から慈済大学の大学院に留学する杉浦生真君が合流。

花蓮と言えば、太魯閣溪谷。3000



メートル級の山々から太平洋に下る大理石の大溪谷で、その規模は想像を絶する。今日は台北に戻る前に少し観光をしようということ、車に分乗し太魯閣溪谷を遡上した。雨の多いこの時期に、巍巍たる山塊の岩肌がくつきり見える好条件で、バンテージも賛嘆の声を上げて歩かれた。南海の島国という台湾の印象が大きく変わったと言われ、壮大な自然を大いに満喫した。

花蓮駅への帰途、新城天主堂に立ち寄った。ここはかつての新城神社で、光復後本殿跡地にノアの箱舟を模したキリスト教会が建てられた。先年亡くなった



スイス人の神父は日本の遺構を廃止する動きに対し、鳥居や灯籠などを残して、この地の歴史を守る運動を主導した。台湾の歴史は来訪者の歴史でもある。17世紀にいたるまで十数の部族が併存する非国家社会を続けていたが、オランダ、鄭氏政権、清朝、日本、中華民国と次々と統治者が変遷した。それぞれの文化、宗教が流入し、各地で摩擦も生じた。新城神社自体も日本軍と原住民の争いの後に建てられた鎮魂の社だった。慶修院もそうだが、中華民国になった後も、その歴史を塗り替えるのではなく、台湾人の歴史として保存伝承すべきだと考える。歴史に対して真摯に向き合う姿勢が感じられる。その積み重ねが、民主国家台湾を形成していく。

午後、花蓮を後にして台北へ。台北駅でAmyさんと再会。お弟子の宮本龍勝さんも合流した。夕食は素食（精進料理）のバイキングだった。台湾には素食のレストランが非常に多く、僧侶でなくとも、普段から肉や魚を食べない人がたくさんいる。素食と言ってもメニューも多く、とてもおいしくいただいた。

6月18日

午前中、台北第一の古刹、龍山寺を参拝。台湾に渡ってきた中国福建省の人が、故郷泉州の龍山寺の観世音菩薩を勧請して建てた。仏教寺院ながら、関帝や媽祖

といった道教の神様も一緒に祀ってある。西門町の台北天后宮を参拝。ここは旧高野山台湾別院弘法寺跡地で、現在は媽祖を本尊とする道教寺院となっている。旧弘法寺の本尊弘法大師や、修行大師像が引き取られてお祀りしてある。そこから歩いて、西門紅楼へ。

佐々井上人初めての台湾行、ぜひ台湾の人々にも佐々井上人のこと、インド仏教のことを知っていただこうと、『男一代菩薩道』台湾特別編輯片上映会&交流会を企画した。李道道さん、Amyさん、そして好人会館ボランティアに参加していた温雅淳さんの協力により事前に映像の字幕を台湾語に翻訳し、Amyさんには会場予約、ポスター、チラシ印刷など、



日本と台湾で何度もメールでやり取りして、準備していただいた。会場の西門紅楼は、日本時代の劇場をリノベーションした有名な施設で、赤レンガがバンテージの袈裟の色に近いことから、つい私が提案したのだが、使用料が高額で、収容人数も多く無駄遣いになるのではとの懸念があった。しかし、黄さん翁さんが台北市文化局に掛け合って、インド仏教を紹介する文化事業として会場使用料が免除され、八角の印象的なホールに約100名の市民が集まった。僧侶も数名参加され、花蓮で知り合った人々や日本人も来場した。会場内には山本宗補さんの写真パネルが展示され、多くの人々が見入っていた。そして開会。

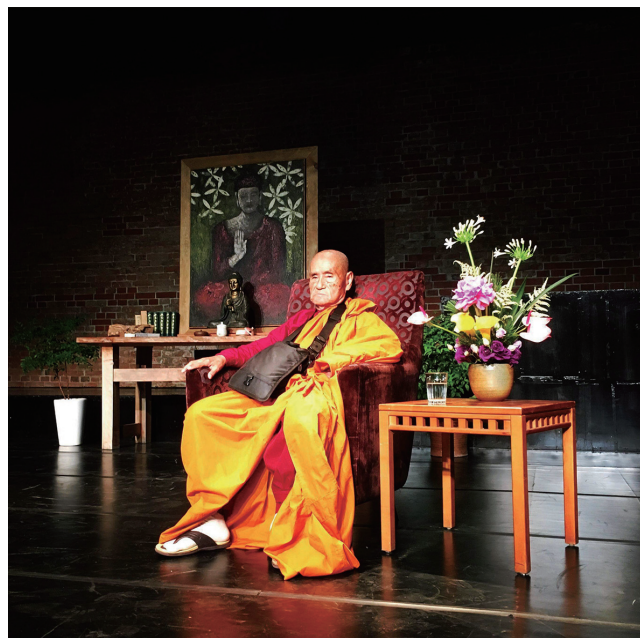


黄さんの推薦で来場された台湾仏教会理事の釋淨耀法師が挨拶され、『男一代菩薩道』上映後、いよいよ佐々井上人登場で、満場の拍手の中バンテージの声が鳴り響く。この数日過ごした台湾の印象を語り、自らの三大誓願であるインド仏教復興、龍樹菩薩顕彰、そして至上命題のブツダガヤ大菩提寺返還運動について、熱く語りかけられた。

私は司会を務めながら、この状況に冷や汗をかいた。直立のまま獅子吼の如くバンテージの声が響き渡る。いったい何を話しているのか？ まんじりともせず聞き入る台湾の人びと。通訳の李さんの苦勞が見て取れた。アンベードカル博士のスローガン「教育せよ 闘争せよ



団結せよ」の「闘争」を強調するバンテージ。「日本も台湾もこの闘争ということが行われていないように思えます！」とまで言われる。李さんにこれをちゃんと訳すように念を押された時、私は近くに駆け寄ってつい「あまり激しい言葉は使わない方が良いと思います」などと言ってしまった。舞台の上で右往左往する私とは対照的に、バンテージは真つすぐ観衆の人たちに向けて語り続け、ようやく話を終えた時、会場全体から大きな拍手が湧き起り、淨耀法師が立ち上がった。バンテージの話を補足するように観衆に説明し、その場で大菩提寺返還運動への資金援助を表明した。更に仏跡巡礼などを企画する旅行会社の方が同じ



く寄付を表明。会は大いに盛り上がりを見せた。

私はこの企画が成功したのか失敗したのかよく分かなかったが、多くの人が関わり、佐々井上人が真剣に話をし、そして台湾の人々が真剣に聞いていたことは事実である。

皆様本当にお疲れさまでした。Amvさん一家、友人、好人会館のボランティアの若者たち、西門紅楼のスタッフの方々、日本から自腹で同行してくれた皆さん。花蓮から駆け付けてくれた皆さん。ありがとうございました。今回の台湾行で中心的なお世話をしてくれた黄榮墩さんは、上映会当日風邪をこじらせて会場に来ることが出来なかった。バンテージは黄さんの顔をまじまじと見つめ「いい顔をしている。良いことをしてきた人はやはり良い顔になる。」と言われていた。わたしもそう思う。謝謝！台湾。

『龍族』は、皆様からの寄稿をお待ちしております。佐々井秀嶺上人に対する思い、研究の成果など様々なテーマで広く受け付けております。

・原稿は事務局宛にメールまたは郵送でお送り下さい。その際、連絡先を忘れずにご明記下さい。

・掲載の可否および時期につきましては編集部にて決定いたします。また、原稿料等はお支払い致し兼ねますので、予めご了承下さい。

佐々井師一時帰国同行記

福島上田編

文・写真 山本宗輔

昨年 9 月に東京から郷里の長野県御代田町に完全に引越したことなどの個人的事情もあり、2016 年のインド取材を最後に、このところ佐々井師の現地取材にでかけられないでいる。2 年もインドから離れていると佐々井師に係る諸事情の変化が気になる。

そうしたこともあり、今回の一時帰国の際は台湾（6 月 14 日～19 日）に同行し、恒例の福島県原発事故被災地、今回は大熊町、浪江町、南相馬市をご案内したりと佐々井師と行動を共にする機会を増やし、佐々井師の体調の良さと頭の回転の明瞭さを強く実感しました。ここでは手短かに台湾、福島県、長野県での佐々井師の動向を報告します。

佐々井師の台湾初訪問に関しては企画され台湾に詳しい佐伯隆快さんや小林三旅さんから詳細な報告に譲るとして、私は個人的印象の要点のみを記しておきます。

台湾西部の花蓮市を本拠地とする慈善団体「慈濟」本部と研修センターを佐々井師一行と訪問。何よりも驚いたことは、50 数年前に尼僧の證嚴法師により創設された仏教の教えを実践する奉仕団体が世

界規模の救援活動を展開していること。エンゲイジドブuddiズム（社会に関与する仏教）、生きた仏教のお手本のような活動に感動。佐々井師に同行したこと知る機会を得たことに感謝したい。

加えて、「慈濟」に関しては、B. R. アンバードカル及びエンゲイジド・ブuddiズム研究会の志賀浄邦京都産大教授が早くから注目し取材して論文を出されていることにも強いご縁を感じる。

この花蓮市は佐伯さんの御祖父の代からの歴史的なつながりがあることも驚きで、慶修院での法要などについては佐伯さんの報告を待ちたい。ちなみに花蓮市には原住民を弾圧し多数を殺害した日本統治時代の負の歴史も煮詰まっていることを知る機会ともなった。

今回の台湾訪問のメインイベントは台北市での三旅さんが製作した佐々井師の映画上映会と佐々井師講演会、それに私の即興写真展。会場は若者の街といわれる西門の日本植民地時代に建てられた八角楼（紅楼）大ホール。佐々井師は壇上に用意された椅子に座することもなく、約 80 名ほどの参加者に向かい、立ったままブダガヤの大菩提寺管理権奪還闘争への支援を熱弁。どこかインド人と共通する信仰心を持つ台湾の人々の琴線に触れたようで反響は大きく、多額の寄付を申し入れた台湾仏教界の重鎮の姿が印象的だった。

例年欠かさず実施する原発事故被災地のご案内。今年も被ばく牛 280 頭を生かし続ける浪江町の「希望の牧場・ふくしま」と南相馬市小高区の同慶寺に田中徳雲住職を訪ねた。どちらも三度四度繰り返し佐々井師をお連れしている。

昨年は原発事故後に牧場で衰弱死したり病死した数多の牛を弔う読経を挙げてもらったが、今年は吉澤さんが浪江町町長選挙に立候補すると本人から聞いていたので、佐々井師を前に立候補の決意を聞くのが狙いだった。というのも馬場有

町長が原発事故による全町避難に対応する苦労から、吉澤さん曰く「ものすごいストレスがかかり、がんで倒れ」任前期に辞任すると公表。実際、馬場町長は牧場を訪問した 2 日後に病で他界してしまった。まだ 69 歳だった。

吉澤さんは選挙公約を 2 点あげ、佐々井師は吉澤さんの立候補の決意とビジョンに聞き入った。「農業の再開できない農地は食糧のためではなく、バイオエタノール生産のための燃料作物を大々的に植える」、「ADR を東電が拒否し続ける



なら、町長が先頭に立ち裁判闘争をしてでも東電に賠償増額を求める」。

何度となく取材して聞き慣れている吉澤節が全開。「牛を生かしつつ、原発の時代を乗り越える」。「考える国民、行動できる国民と深くつながる方法を考えている。国民の実力が問われている」。

今回佐々井師に同行し福島県の被災地を初めて訪問する尾道市の竹本泰広君と佐々井師の前に、吉澤さんのよどみのないスピーチが炸裂した。佐々井師は心を揺さぶられ、「久しぶりに日本男児に会っ



た。オレも刺激されたぞ」と反応した。

同慶寺の田中徳雲師には今年も案内していただき、東電の事故原発の排気塔が肉眼で見える大津波で壊滅した請戸地区を見渡せる高台に設置された大津波犠牲者慰霊碑に着いた。高さ15.5メートルに及ぶ大津波の犠牲者は182名。一人一人の名前を刻む大きな慰霊碑が展望台を兼ねた公園に建立されていた。

「住民は避難を余儀なくされ、一八二名の尊い命が失われた」と刻まれた追悼文が痛々しい。佐々井師と田中徳雲師は死



者供養の読経を懇ろにあげた。慰霊碑が後世への警告として機能することを強く願うばかりだ。

翌26日は皇居が眼下に一望できるビルの一室を使い、澤登拓氏の働きかけで150人の若手起業家を対象にした講演会が開催され、前座で佐々井師紹介をパワポでさせていただいた。

翌27日は休む間もなく長野県上田市の妙光寺へ。佐々井師はインドラ寺院事務局長のアミット氏から預かった仏像を寄贈する役目を負っていた。日蓮宗寺院の妙光寺の宮淵泰存住職と奥さんが長年の佐々井師支援者という縁もあり、佐々井師がお寺を訪問するのは2009年の一時帰国を初回とし今回で4度目。宮淵上人は2010年の龍樹菩薩大落慶法要にも参列されるほど佐々井師の活動を熱心に支援。南天会の賛同人でもある。その妙光寺さんのお寺紹介文はこうなっている。



年、広島城浅野家より上田城仙石忠俊候にお興入れになった亀姫様が守り本尊として捧持してきたもの。

『法華経』提婆達多品(だいばだつたほん)第十二では娑竭羅龍王の娘は8才にして成仏したと書かれています。仏教徒の中では、この成仏した8才の龍女が、日本には弁財天として応現され、また身延山には七面大明神として応現されたと感得されています。弁財天に大変ご縁のあるお経です。

平家、宮島、亀、サツカラ龍王……。佐々井師が強い関心を持つキーワードが散りばめられている。今回の佐々井師来訪について宮淵上人は次のように広報された。「本年4月15日に新たに奉安した2メートルの八臂弁財天大立像に、ご法楽の祈りを捧げていただきます。インド・ナグプール遺跡の聖石と霊鷲山の聖石、そして法華経・お題目の写経を大像に奉体致

妙光寺に安置される弁財天は、「日本三大弁財天(広島県厳島大願寺、鎌倉の江島神社、琵琶湖竹生島宝厳寺)のひとつ厳島弁才天の分身であり、1658



します。

佐々井秀嶺上人が自力で発掘されたマンセル遺跡のシャッカラ湖は、8歳の龍女が、文殊師利菩薩の教化を受け、霊鷲山は、龍女成仏が証される聖地であります。

新幹線で上田入りした佐々井師。アミットさんからの仏像を宮淵上人にお渡しし、本堂に仏像を安置し入魂する経をお二人であげた。弁天堂に移ってからは、八臂弁財天大立像を前に、宮淵上人の太鼓の伴奏もあつてか、佐々井師は鬼気迫る迫力の読経で弁財天像に魂を入れた。小林三旅さん撮影の動画でこの時の迫力を味わっていただきたい。

上田市からは車で約1時間の我が家に移動し、我が家の安全祈願していただき、佐々井師の青年時代に降り立った信濃追分駅を訪ね、軽井沢駅から東京の宿に向かわれた。ちなみに山本家は御代田町にある真言宗智山派真楽寺の檀家。真楽寺

には浅間山の伏流水が湧き出る「龍神の池」がある。

29日は都内、中野サンプラザのホールで、神谷光徳氏、窪寺伸浩氏と佐々井師の鼎談が開催され、この会でも私は前座として佐々井師の活動をパワポで紹介。この会は、山際素男著『破天』(単行本の初版本)に圧倒され生前の山際先生に二度も会い、佐々井師の講演会実現の構想を長年練っていた窪寺氏の執念で実現した。

私の報告の結びに、82歳の佐々井師が60年前には涙をボロボロと流した思い出の詰まった場所が信濃追分駅であることが知ったことをお伝えしておきたい。山際先生さえも聞いていない青年時代の逸話はまだまだありそうなのだ。

追記…後日談だが、吉澤さんが立候補した浪江町町長選挙は8月5日に投票票が行われ、大半の町議の支持も受けた前町議会議長の吉田数博氏が圧勝。投票率

は約43パーセント。吉田氏5231票、

吉澤さんは1282票。住民の関心の低さと諦めの気持ちを反映していた。私は琉球新報に取材ルポを寄稿したが、もし当選したら吉澤さんはエサやりなどの責務を担う牧場長と町長の二足のワラジは両立できないと自覚していた。吉澤流の権力批判の活動自粛も心配の必要がなくなつたので個人的にほっとしている。

バンテージをお迎えして 道場開き

日本武徳院殺活自在流
師範・剣士 黒澤龍雲
(写真 大社優子)

私にとってバンテージは、最初にお会いし、剣の演武をご覧に入れた時に、「龍雲」という法名をうけたまわり、その後、自身の剣の流儀を「殺活自在流」と名乗る時も、名に生命を吹き込んでい



ただいたり、人生の節目に、いつもそばにいてくださる、大切な恩師です。

さて、このたび縁あつて、ささやかながらも地下に道場のスペースを取れる物件が見つかり、引っ越したので、ここでの道場開きはバンテージをお迎えして執り行いたいと思いました。

物件を探しはじめてから購入まで、あつという間で、まるで何かに導かれてあるかのようでした。京急井土ヶ谷駅から十分ほど歩いた丘の上にある小さな家ですが、外から見たらそこに道場があるとはまったく分からないところが気に入りました。もちろん、もともと道場とし



て作られた家ではないので、天井を抜いて高くしたり、吸音材をいれ、サッシを二重にして防音したり、いろいろと手をいれました。バンテージがいらっしゃる日が決まっていたので、間に合わせるのに気を遣い、手を尽くしてくれた職人さんたちには、大変感謝しております。

龍族として、地下にある道場にふさわしい名前とは何であるか、いろいろと思案したところ、「臥龍^{がりよう}」という言葉が思い浮かびました。辞書によると「臥龍」とは臥してうずくまった龍のこと。龍が臥すのは地面ではなく、池中であろうから、地下空間を龍の臥す池に見立てるのも風流で、趣があります。また臥龍の意味としてもうひとつ、優れた能力を持ちながら、世に知られていない人物、在野の傑物というのがあります。バンテージは世に知られていますが、在野の傑物に間違いないだろうから、こちらの意

味も龍族としてふさわしいと思います。よって新道場は、「臥龍館道場」という名前にいたしました。場を整え、名前も決めて、7月1日にいよいよバンテージをお迎えして道場開きを執り行うこととなりました。

よく晴れた日曜日、横浜の丘の上へいらしてくれたバンテージは、去年よりも元氣そうで、大変頼もしくみました。リビングでひと休みしていただいたあと、地下に降りて、道場開きを始めます。まずは私が刀で四方八方と天地の魔を祓う「十方祓の儀」を行い、そうして道場を清めたあと、バンテージのお祝いのお言葉をいただき、その後、参列した門弟たちも含め、全員で般若心経をあげ、無事結願しました。

バンテージのあげる般若心経は、他の方とはまったく違う、一種独特なものだと私は感じます。肚の底から魂を込め



て、氣を入れて、それをひとつひとつの言葉にのせて空間に放出しているのが、一緒にお経をあげてみると、より体感できます。お経は退屈さの象徴のように言われることもありますが、それは言っている側の教養のなさと同時に、お経をあげている側の氣の足りなさや、口先だけで同じ言葉を反復し、真心がこもっていないことを見透かされているところもあるのではないのでしょうか。密教に、如来と自己が一体となる「入我入観」というのがありますが、我は仏なりの覚悟で、真剣に仏道に邁進している人がどれほどいるのでしょうか。昔からこういうものだからと、表面の形をなぞっている人も多いのではないのでしょうか。バンテージはまったく違います。伝法や作法に頼らず、たとえ決められた形をなぞらなくとも、瞬時に仏と一体となる。いや、バンテージの場合は常に仏と一体だと言

切った方がふさわしいと思います。我と仏が、ふたつに分かれているのではなく、ひとつだということを肚の底から実感することを悟りというなら、バンテージはすでに悟った人だと私は思います。そうだとすると、仏教の悟りというのは実に人間くさくて良いものですね。

そんなバンテージの魂が注入された道場を、これからどのような形で活用していくか、未だ思案中ですが、バンテージからいただいた「龍雲」という名、「殺活自在流」という流儀の名に恥じぬよう、剣の道に精進したいと思しますので、龍族の皆さんには今後ともよろしくお願いいたします。



光の方向

佐々井上人お弟子
南天会賛同人 高山龍智

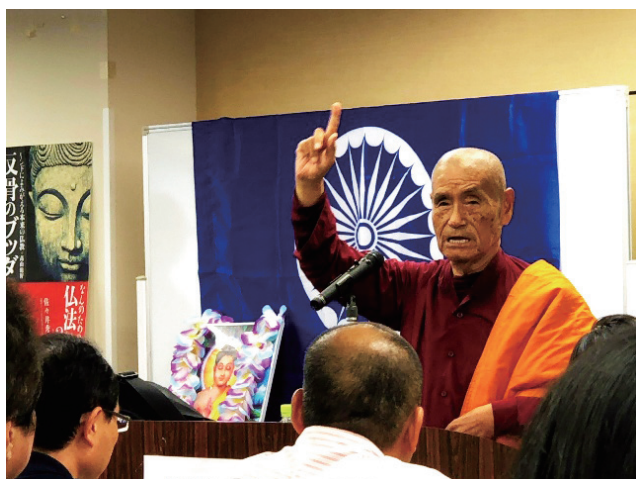
去る6月30日土曜、東京都千代田区神保町にて、拙著『反骨のブッダ』出版記念講演会を開催いたしました。

まるで「インド」を思わせるような猛暑の中、たくさんの方々に御参加を賜り、深く深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

また、本書の上梓に到るまで全面的な理解と協力をいただいたコスモ21社出版プロデューサー氏と、気まぐれでわがままなこの私を見事な手綱さばきでゴールへ向かわせてくれた友人編集者に改めて感謝いたします。そして、異例中の異例として本書に巻頭言を寄せていただき、そのうえサインの掲載まで快諾してくださった師父佐々井秀嶺に、心より感謝申し上げます。

出版記念会での佐々井師の講演は、予定を大きく上回り、およそ1時間10分にも及びました。しかもその間ずっと立ったまま、時にユーモアを交え、時に辛辣な皮肉も絡めつつ、いつも以上に力強く、熱く語ってくださいました。

ところで、佐々井師のお話について、



弟子の立場から日本の皆さんにお伝えしておきたいことがあります。師は50年以上インド最下層民衆と共に生きてきたため、思考はヒンディー語なのです。日本人の顔で日本語で話してくれますが、じつは脳内で瞬時に和訳しているのです。今年で八十三才、病氣と怪我で満身創痍の老人が……ですよ？

あえて俗な例えを使いますが、西洋の格言に、

「愛し合うとは見つめ合うことではない、同じ方向を見ることだ」

という言葉があるのをご存知かと思えます。日本人の顔で日本語で話す佐々井師の慈光に見惚れるのも結構ですが、それは、佐々井師と同じ方向を見ていない、

ということなのです。

仏教復興・差別撤廃・人間解放・インド文化の説明・大乘発祥の地マンセル遺跡の顕彰・聖地ブッダガヤ大菩提寺の管理権奪還闘争、そして、弱き者・小さき者たちの笑顔を守るため「怒ること」「気にすること」「反応する生き方」……。

それら佐々井師の視野をすべてカバーすることは、おそらく誰にも出来ないでしょう。もちろん私も到底無理です。しかし、そのうちの一つだけでも同じ方向を見ることなら、なんとか出来るのではないのでしょうか。

ずいぶん口幅つたいことを申しましたが、これも私の『反骨』と何とぞ御海恵くださいませ。

さて講演の最中、師は私を指して、「こいつは反骨ですよ、反骨。ああ、すごい反骨だ」と仰られました。

実を言うと、その時私は、かつてインドで佐々井師と「あわや取っ組み合いの大喧嘩！」になりかけたことを話されるのではないかと？ と思い、一瞬ヒヤッとしたことを白状いたします。

ジャイ・ビーム！

【写真上・中＝講演会の様子】
提供…まち様

【下＝インド帰国直前、成田空港にて】
（高山師ブログ『てやんDay!』より転載）

バンテージ随聞拙記

佐々井上人お弟子 位田龍樹

バンテージのお言葉は、荒々しさもありますが、根底には優しさがあります。

私が初めてお会いしたのは、その2年程前に大病をした後でした。一時心肺停止の臨死状態にまで陥り、ササイ死去の一報が世界を駆け巡った程でした。その後はなんとか持ち直したものの、ともすると車椅子に乗り、文字通り、数十年の身を呈した活動の代償の古傷があちこち再発し、立ち居振る舞いもままならない様子でした。

ですので、荒れはてたスラム街で、極貧の人々と生活を共にしていた頃はもちろん、後にインド国家政府をも相手に、心身の痛みをとまなう激しい活動をしていた頃の、熾烈なバンテージを知りません。初めは理解されず、逆に命の危険を感じるとある種の迫害を受けたり、その活動も、夢物語、無駄な事と嘲笑されたそうです。しかし一人差別に徹底的にあらがい、人々の困窮を一つ一つ立て直し、いっしょに社会の意識をも変えてしまった、その頃の厳しいバンテージを知りません。今ではかつての覇気も一見なりを潜め、バンテージの以前を知る人から聞く所に比べて、大分穏やかになっているように

す。そのようなバンテージも、この旅の途中幾度か声を荒げた事がありました。その大抵は、他者への配慮が足りていない時などでした。

またその一つに、私自身叱られた事がありました。翌日の移動についての確認が取れなかった時の事です。前日の夜になっても、送って下さる約束をした方と連絡がつかず、もし何かあったら最悪私が後始末つけます、と私が言った途端です。馬鹿野郎！と一喝されてしまいました。そんな事はお前がする事じゃねえんだ。何かあったら俺がやるから、お前は心配するな！と、その迫力には私は返す言葉も無く、ただ、はいと言うのみでした。同時にその時に得た、何とも言えない安心感を今でも覚えています。

普段から抜けていてそそかしい私です。その度、お前は全く……とよく言われてしまします。しかしそれでも、バンテージは尚も見守ってくれているのだと感じました。そしてこの方が、インドで一人、ずっとなさってきたのはこういう事なのだと改めて思いました。他者の心に深く共感し、理解して寄り添ってくれる。そして誰もが大切な我が身体を投げだし、弱者を見捨てず、力になってくれる。そんな人が近くにいて、自分を見守っていてくれる事の安心感、信頼感。それはまるで菩薩そのものです。バンテージはよく誰かに例えられたり、

類型に分類される事もあります。しかし私はこの方と似たような人を知りません。自己の不利益を問わず、人生をここまで他者に尽くして生きてきた方を、寡聞にして聞いた事がありません。これほど苦悩を理解しながら、人間、世俗を暖かく肯定してくれる方を見た事ありません。自分より他者の幸せを優先すると言う、利他一義の絶対の使命感を持つ方を、他に知りません。

バンテージの一番誰とも異なり、誰も敵わない所は、他者と共感する力だと思えます。共感する心、それは即ち他者の喜びを我が事のように慈しみ、他者の苦悩を我が事のように悲しむ、慈悲の心です。

その慈悲を説く仏教は、人の幸せとは何か、を説く教えです。仏教の理想は、煩惱を滅却した末に俗世から離れる事ではありません。それでは釈尊が35歳で真理を覚った後の、残る45年の生涯の説明ができません。釈尊の覚られた思想は、ブッダとなった後の45年間にこそ現れているのではないのでしょうか。そしてその45年間は、人々を幸せに導く慈悲にあふれ、利他に尽きているように思えます。つまり仏教とは、この世をよりよく生きる為の、この世で幸せになるための教えなのだと思います。

では人が幸せになるために、なにが必要なのか。それに対して大乘仏教の出した答え、その教えは、利他です。そして

その利他の原動力となるものは、他者への共感です。「他者への共感、他者を理解する事、同体大悲」の大事は、バンテージが常々口にする所です。人の心を我が事のように感じて、初めてその人が理解出来ます。そして他者への理解があるからこそ、他者に喜びを与える事ができます。そしてまた他者の喜びを我が事のように感じられるからこそ、共に自分も喜びに生きる事ができます。

勿論、宇宙の真理を我が身を持つて悟る事は、大事な事だと思えます。しかし、厳しい修行もできず、深い哲理も理解できない私のような凡夫にとって、仏教は人生の助けにならないのでしょうか。私はそのような事はないと思えます。それを悟れずとも、仏教的幸せを得る事はできると思えます。テレビの仕組みを知らなくても、テレビを見る事ができるよ。我々は、テレビの電源ボタンを押す事を知っていれば、テレビを見る事ができます。それと同じように、宇宙の真理を知らなくとも、釈尊、アンベードカル博士、バンテージの説く、利他の教えに学べば幸せを得る事ができるのです。古来より、利己的な自己実現や満足の先に、自身の幸せはあり得ないことは、仏教に教え説かれて来ました。何故なら、煩惱には際限がないからです。例えばお腹いっぱい食べたからといって、その先の人生もう何も食べなくていいと言う人

は居ません。またお腹は減るのです。そしていたずらに一時の満腹の快楽を求め、その快楽に中毒してしまえば、却ってそれが無い事の渴きに責め苦しめられる事になります。

いくら満たしても必ずお腹が減るように、決して満たしきる事が出来ないのが自己満足なのです。それゆえ欲すれば欲するほど、満たされない不満がますます膨れ上がり、因果応報とばかりにいよいよ自分を悩み煩わせます。また実際、行き過ぎた資本主義問題ではありませんが、終わりの無い自己肥大に迫られる心の虚しさは、現代日本の疲弊感、閉塞感となつて現れている気がします。価値の基準を自己から他者へ移す事こそが、自身の幸せにつながることは、2500年前に釈尊の説いた教えです。

ただしそれは、自己を否定する事ではありません。ましてや、自己の否定を、他者に強要する事でもありません。それは慈悲の全くの本末転倒、愚の骨頂です。相手から見れば、自身みずから他者です。もしも自分を満たそうと思うなら、他者を満たす社会を作らねばなりません。逆に他者を否定する社会とは、自分も他者に否定される社会です。その行き着く先は、お互いみんなが無理解、みんなも自分も不幸せです。先の戦争の悲惨さを、再現したい人はいないと思います。

自他の意見の相違はあつて然るべきです。その上でなお、少しでもお互いが理解しあう事を諦めてはいけないと思います。自他を尊重し合おうとする事をやめてはいけないと思います。生かすべきは他者の尊厳や生命であり、正しい意見ではありません。思い込みにとられ自分を失い、忍耐を忘れ、他者を理解する事をやめた時が不幸の始まりです。皆が幸せになる、慈悲の実践こそが闢う仏教であり、アンバードカル博士、バンテージのなしてきた事そのものです。自分同様に、積極的に他者の命をも生かそうとする利他行こそが、菩薩道なのだとバンテージはその身をもって示されている様に思いました。

また、この事とある種通じる所があるかも知れませんが、今回同行させて頂きながら、バンテージがとまどっているように感じる場面に出会う事が、少なからずありました。それは大抵、バンテージが宗教者である事への、配慮が足りていないように感じた時でした。

不犯、不飲酒、等々、自らを戒める僧侶を相手に、みだりに肌を見せないように慎んだり、目の前でお酒を飲まない事は、定まった形式という以前の配慮や気遣いだと思います。ダイエットをしていると分かっていている人の前で、ムシヤムシヤご飯を食べたり、不躰に甘い物を勧める人はいないと思います。またお酒を

飲みながらお坊さんの話を聞くなど、インドではあり得ません。インドに限らず、タイ、ミャンマー、チベットなど、どこかの仏教国でも眉をひそめられてしまうでしょう。バンテージは日本人として生まれましたが、もはや、インド人の僧侶としての時間の方が遥かに長く人生を占めています。時に何気なく私にヒンディー語で話しかける程、インド下層民衆に身も心も捧げて来た方です。そしてインド仏教僧として、これまで数十年間も厳しく戒律を守り、今なおインド人の常識の中で暮らしておられます。

文化や宗教、常識非常識、礼非礼など、価値観は古今東西異なります。ゆえに、もしも他者に礼儀を尽くそうと思うなら、その人の思想や生き方、文化的背景を尊重する事は、礼節の一つではないでしょうか。何もバンテージに対してだけではなく、本当に相手に敬意を示そうと思うなら、その人がどのような価値観を持っているか、何に友好を感じるか、それを知らうと努力する事は大切な事だと思います。

しかし、バンテージご自身はと言えば、何もおっしゃいません。むしろ他者を理解し、必要とし待っていてくれる人がいるなら、山だろうと何処だろうと、疲れた体をひきずってでも行く事を厭いません。身体を惜しむ事なかれ、と他者よりも自分を優先する事を良しとしません。

大抵の場合、親切とはいいながらその実際は、自分のやりたい事の、他者への押し付けである事が少なくありません。親切を隠れみのに、その場限りの、他者を利用した自己満足に終わってしまう事がほとんどだと思います。考え方、正しさ、物の見方が人それぞれ違うように、何が喜びか、何に満足を見出すかは皆それぞれ違います。本当にそれが相手の喜びになるのか、相手の人生に幸せをもたらすのかまで考え、自覚を持って行動する事は、中々の難事です。

更にはもし、独りよがりな価値観の押し付けが過ぎれば、相手の価値観の否定につながるしてしまいます。そして相手の価値観の否定や、考え方への無理解が進めば、その人の人格の否定にまで繋がってしまう事もあります。ひいてはその一方的な正しさ、偏った物の見方が凝り固まった結果は、カースト制などの差別です。そして他者への無理解、否定の連鎖の行き着く最後は、殺し合い、戦争です。しかもその事の危険なところは、押し付けている側に、相手に対する罪悪感、自己に対する反省がない事です。そこに在るのは、ただ他者を否定する事から得られる、間違つた自己肯定感です。他者や世界が、自分の思い通りでないとい我慢ができない、稚拙なわがままです。その陶酔感から得られる、貧弱な優越感、瑣末な自己満足があるのみです。そのような

自己満足が結局、自身の心の安寧につながらない事は、先に述べた通りです。

バンテージのなさって来た事はそれとは反対です。そもそも仏教の教えも、それとは異なります。利他の乏しい所へ利他の和を広げ、共感無き世界には断固声を上げる。他者の否定ではなく、他者の理解。自己にとどまらない、他者、社会の救済。それこそ、大乘仏教の大乗たる所ゆえんなのかも知れません。仏教各々の宗祖の求めた理想なのかも知れません。

バンテージに、慈悲についてお聞きしたそのお答えは、「利他一義、自己を残さずに、徹底的に、相手に等しく寄り添った行動」との事でした。そしてこれまで述べて来た「利他の根幹をなすものは、他者への共感である」とは、またバンテージのお言葉です。もし本当に相手に共感できるなら、自分の偏見の押し付けでその人が感じる精神的不快、身体的苦痛を、自分も同じように感じてしまい、とても差別など出来ないでしょう。言葉や行為による暴力によって相手が感じる悲しみに、無関心である事などあり得ないでしょう。自己の利益のために、他者を泣かす

事など、出来ようはずありません。

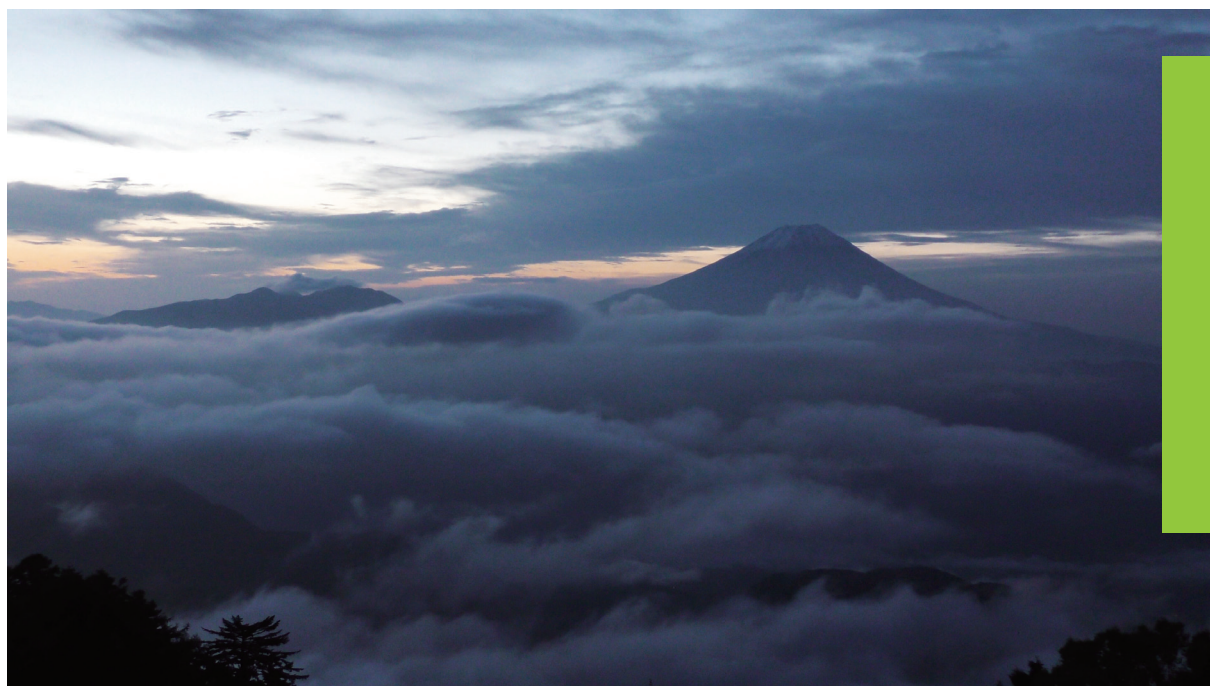
無理解、不寛容、不信任、拒否の、共感無き世界と、理解、許容、信頼、補い合う、共感の世界、どちらが暮らしやすいかは、論を俟ちません。他者への共感の力強さこそ、慈悲の力強さであり、社会を幸福にする物に他なりません。

またそれは、社会や経済に留まらず、美にも通ずる物かも知れません。人生を豊かにし、華やかに彩る、凡そ芸術と呼ばれるもの、即ち絵画、造形、映像、音楽、演舞、文章などにおいて、美とは感動だと思えます。何か分からないが、我が身に入り込み、共感してしまい、心をゆり動かされてしまう。その感動を呼ぶ共感性、即ち利他性を持ったものが美なのだと思います。真なる善美において、利他の無い物は、無いのかも知れません。

バンテージのお言葉、行動に多くの人が心動かされてしまうのは、そのせいかも知れません。ご一緒にいて、バンテージの心は、常に他者の心へと向いているように思いました。

七面山参拝随記

小林三旅



七面山（注…日蓮宗総本山である身延山の西にそびえる霊山）は標高差が1500メートルもあり本格的な登山道。信仰の道にふさわしく、とても綺麗に整備されており、その高低差に比べ、決して難しさは感じさせませんでした。

6月1日、早朝6時、各地から集まった20人以上の同行者とともに賑やかに麓を出発。ベテランの剛力さんのお助けを借りて、若住職の力強いお題目のリズムに元気づけられ、息が切れたらすぐに立ち止まり、深呼吸をくりかえしながら慎重に歩みを進めます。

午後3時ごろ、山頂に到着。この高い場所にどうやって作ったのか不思議なほど大きく壮麗な敬慎院に到着。バンテージはさすがにお疲れのようでしたが、体調は良く安心しました。

夜は食事の後にバンテージから、敬慎院ご本尊である七面大明神の由縁についてのお話、本堂にてお勤めの後、敬慎院の宝物を見学しました。

翌朝は御来光を拝むために日の出前に山門前に向かいました。雲海の中に浮かぶ富士山の姿は見事でしたら、日の出直前に霧が立ち込め残念ながら御



来光を拝むことはできませんでした。しかし、下山前に立ち寄った奥の院からは晴れ渡る空の下、見事な富士山を見ることができました。

そして下山。実は下山の方が足腰が弱くなった人は大変な作業になり、途中から「腰から下が幽霊になった」と言うほど、腰が抜けたように力が入らなくなり、三人係で支えながらの下山となりました。



年齢や体力のこともあつて、大変不安だった七面山登山でしたが、内船寺のご住職、奥様、若住職、また80代にして同行された、誰よりも決死の覚悟だっただろ古屋さん他、参加された皆様の励ま

しとおもてなしに改めて感謝いたします。そして、ここにまた一つ、目の前でパンテージの物語が生まれたことを実感するイベントでした。

泥だらけ、糞だらけ、傷だらけ、 インド民衆の奴隷たらん

インド・ナグプールより

お坊さんだより その1 『人権21』2018年6月号

佐々井上人お弟子 亀井竜亀

(電話インタビュー 聞き手 菅木智子)

日本のみなさん、こんにちは。最高気温48度、太陽の下では1分とじっとしてゐることはできません。そんなインド大陸の中心に位置するナグプール市より身の回りのことをお届けします。

日常風景と言ってもちよつとテレビや観光で見聞きするものとは違うかもしれせん。

私は竜亀といい、今年41歳になる仏教のお坊さんです。お坊さんといってもインドで僧侶にして頂いてからまだ1年半の新米僧侶です。ここナグプールでは生

活風景にお坊さんがいるのが当たり前です。ナグプールは別名オレンジシティとも呼ばれ果物のオレンジが名産です。

人口は250万人、インド全体では13番目に大きな都市です。大体、京都と同じくらいの人口でしょうか。インド全人口では13億人を超えたと言われています。

ナグプールの街中ではデコボコした道路がきれいにコンクリートで整備され、メトロと言われるモノレールが急ピッチで建設されています。バラック小屋が3階建てのコンクリートの家



▲インドのお坊さん食事風景



▶バンテージのお寺にトイレの浄化槽を作っている風景。コンクリートを練る人、渡す人、ブロックを積む人。13億人に仕事を渡すには1つの仕事でも手当てを分けあって少しずつ働かないのです。



▲バンテージは子供が大好きです。

寝食を共にし仏像の色塗りをしました。彼は高校を卒業してから35年間ペンキ屋さんの仕事をし結婚もして4人の女の子をもうけました。しかしその4人ともが小さなときに病気でなくなってしまうのです。奥さんは気がおかしくなり、とうとう一緒に暮らせなくなり彼はお坊さんになることを決意したのです。

しかし文盲だけの憲法では実際の差別はなくなりません。心からの変化を求め1956年亡くなる直前にアンベードカル博士は、差別で苦しむ不可触民衆30万人と共に、ここナグプールで仏教徒に改宗したのです。

私の御師匠である佐々井秀嶺上人はアンベードカル博士が亡くなった11年後、1967年に初めてインドへ来られて以来51年間、ナグプールを拠点に仏教復興運動を指導されている方です。

私が住んでいるところはお寺のある所より徒歩で10分ほど離れたコンクリート2階建ての寄進された建物です。この1階はお坊さんが泊まる場所となっていて2階は日本から来たお客さんが泊まるようになっていきます。私はこの僧坊を管理する28歳のインド人僧侶・ナーガンダと共同で生活しています。彼は若い僧侶のリーダー的存在で信頼が厚く、また日本人に対しても大変気遣いし困った時には大変頼り甲斐があります。僧坊は

インド各地よりいろんなお坊さんが来て情報交換をしたり食事をしたりして常賑やかな場所となっています。

ナグプールには5000~10000人くらいのお坊さんがいます。ある時、ナーガンダになぜお坊さんになったのか聞いてみました。彼はまだ若く遊びたいこと、やりたいことがあるはずなのになぜ僧侶を目指したのか疑問に思ったのがきっかけでした。ナーガンダは8歳のときに父親を交通事故で亡くします。母親は貧しさから彼を育てることができず、彼は孤児院に預けられました。7年間田舎の孤児院で過ごした後、15歳の時に老婆ちゃんに連れられてお寺にきました。お婆ちゃん自身が尼僧として生活されておりナーガンダの将来を危惧して僧侶の道を彼に進めたのです。彼は高校に通いつつ週末はお坊さんの修行をし、卒業後は正式に出家し僧侶となりました。

他に私と同じ年41歳になるダンマラクシートというお坊さんがいます。彼はある時僧坊に来て3ヶ月ほど一緒に生活しました。とても痩せており日々、瞑想修行する彼に、なぜお坊さんになったのか聞いてみました。彼は「心の平安のため」と即答しました。彼は10歳で家庭の貧しさから学校に通えなくなり、35歳まで25年間、清掃や日雇いの仕事をしながら生活してきたそうです。小さな時で1000ルピー、大人になっても3000ルピーくらいが彼の1日の収入です。日本円で2000円から6000円くらいです。食べて行くことが精一杯の収入です。彼は将来に対して希望が持てず母親と共にお寺にやってきました。その時から僧侶となりました。今は不安がなく幸せだといって日々何事にもとらわれることのない生活をしています。

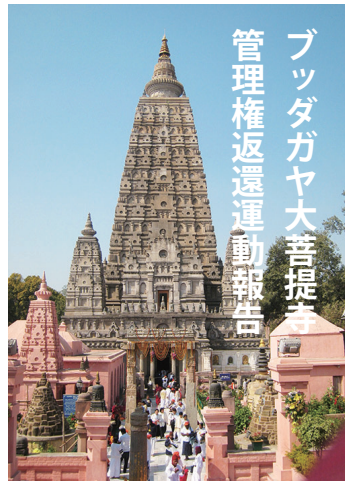
もう一人、マハナグという50歳くらいのお坊さんがいます。彼とは1ヶ月間、

とを決意したのです。

日本ではインドのどのような顔が映し出されているでしょうか。経済成長の明るい面、または貧しい生活の暗い姿が伝えられているでしょうか。インドは今ほとんど豊かになってきています。しかし13億人が暮らすインドの大半は貧しくまだまだ苦しい生き方を強いられているのです。なぜ貧しく苦しいのか、そこは外国には届きません。インドの闇として隠されているのです。

その闇に真正面から取り組んだ一人のインド人がいます。インド初代法務大臣B・R・アンベードカル(1891~1956)です。彼はその闇をインドに何千年と踏襲されてきた隷属身分制度のカーストにあると断言しその撤廃に生涯をかけ、遂に憲法によってカースト制度を撤廃しました。

仏教徒への改宗、そして仏教復興の運動が両輪となってインド社会を差別という闇から目覚めさせようとしています。インドの闇。アンベードカル博士。仏教。佐々井秀嶺上人。この数奇であり必然でもあった関係に目に見えぬ現代インドを見るができます。



ブッダガヤ大菩提寺 管理権返還運動報告

この度佐々井上人は来日するにあたり、ブッダガヤ大菩提寺の返還運動をアピールすることを第一の目的に上げられ、南天会でもパンフレットを作成し各講演会や参拝寺院などで配布して、この問題の認識を促し裁判費用の援助を要請しました。南天会は「ブッダガヤ大菩提寺解放本部日本窓口」として、支援金を取りまとめインドに送金するとともに、支援者の方々に状況報告を行い、関係する情報を龍族誌上に掲載してまいります。

教壊滅。ブッダガヤ荒廃。

18世紀初頭 ヒンドゥー教バラモンのマハント・ギリ、ムガル皇帝よりブッダガヤ大塔の所有を認められる。

1880年 インド考古調査局アレキサンダー・カニンガム長官大塔発掘。

1891年 スリランカのアナガリカ・ダルマパーラ、大菩提会を設立。大塔の買収運動を展開。

1894年 日本で印度仏蹟復興会設立。ダルマパーラの運動を支援。その後、日本の仏像安置を巡りダルマパーラとマハントの対立が深まり、買収運動は不調に終わる。大菩提会はこの問題を国際的にアピールし、各仏教国より様々な申し入れが行われる。

1947年 インド独立。

1949年 ブッダガヤ寺院法施行。ブッダガヤ寺院管理委員会発足。管理委員9名内訳……インド国籍のヒンドゥー教徒4名（マハントを含む）、インド国籍の仏教徒4名、ガヤ地区長官（ヒンドゥー教徒であること）※ヒンドゥー教徒の教的優位が規定されている。

1950年 インド憲法施行。第13条、憲法と矛盾する憲法施行以前の法律を無効とする違憲審査制が規定されている。

1953年 マハントより大塔の引き渡しが行われる。

1956年 ブッダ入滅2500年を記念してブッダジャヤンティが開催される。ネルー首相の指導のもとブッダガヤを国際仏教センターにする計画が発表され、以後ブッダガヤに世界各国の寺院が建立される。一方ブッダガヤの観光地化が進み、治安の悪化、仏像の盗難、遺跡の破壊などが横行する。

B. R. アンベードカル博士、ナグプールで数十万人の人々と共に仏教に改宗。インド仏教復興の端緒を開く。

1968年 佐々井上人ナグプールに入る。アンベードカル博士の仏教復興運動を継承、各地で改宗式を行い、仏教徒人口増大。

1992年 ナグプールの仏教徒のブッダガヤ参拝を機に、大菩提寺の現状を問題視。ブッダガヤ大菩提寺奪還闘争開始。「ブッダガヤ大菩提寺全インド解放実行委員会」結成。ナグプール、ボンベイ、デリー、ブッダガヤ5000キロ大デモ行進。デリーでの座り込み。ブッダガヤでの仏教徒集会や断食など、キャンペーンは2004年までに十数次に及び、インド政府、ビハール州政府への申し入れ、国連事務総長への書簡提出、仏教国への協力要請など国内外に向けた活動が展開される。

スコ世界文化遺産に登録。これを受けて佐々井上人はバリのユネスコ本部、ジュネーブの国連人権高等弁務官事務所を訪問し、ブッダガヤ大菩提寺のユネスコ、国連による厳正な管理を要請。

2003年 佐々井上人、インド政府少数者委員会仏教徒代表に就任。

2005年 日本臨済宗・黄檗宗連合各派合議所アピール

2012年 インド政府、ビハール州政府、ブッダガヤ寺院管理委員会を相手に、佐々井上人が原告となり、1949年ブッダガヤ寺院法の無効を訴える裁判を最高裁に提訴。

ブッダガヤ寺院管理委員会を被告とする先行裁判が複数あり佐々井上人の裁判は審議待機の状態が続く。2018年 前2件の裁判が終了し、7月本格審議開始。

【返還運動への理解】

ブッダガヤ大菩提寺の管理権を巡る運動は、カニンガムが大規模な発掘を行い、大塔が再び姿を現した1880年当初から、世界の仏教国の人々により続けられている運動です。この間、度重なる挫折を繰り返しながらも、仏教徒らしく決して武力に訴えることなく進められてきました。大塔の修復、周辺地の整備、治安の改善、住民の生活向上など、多くは

【裁判に至る経緯】

13世紀初頭 イスラム軍の侵攻により仏

この運動によるところが大きいのです。2002年のユネスコ世界遺産登録は、その成果の一つの結実と言えるでしょう。そして主に外国からの要請だった大塔の仏教徒への返還は、1956年アンベードカル博士の仏教改宗により復興の端緒を開いたインド仏教徒が、自らの宗教の聖地を取り戻す運動として主体的に活動するようになりました。その最先頭を歩き続けているのが佐々井秀嶺上人なのです。かつて法の守護者となることを誓ったダルマバーラ居士が、またダルマバーラを支援した日本の仏教者が、さらには世界の仏教国の人々が、そして現地インドの仏教徒がまさに希求するところは、“仏教第一の聖地ブツダガヤ大菩提寺を仏教徒が管理する”という至極当然の結論なのです。

25年以上に亘り、世界中の誰よりもこの問題に取り組んできた佐々井上人は、今インド最高裁においてその重要な局面を迎え、再び世界中の仏教徒に協力を呼びかけています。

【大菩提寺裁判費用支援者御芳名】

岡山県	華蔵寺	阿形国明	2000000円
広島県	宍戸末美	1010000円	
台湾	魏賢政	5000米ドル	
東京都	元永悠介	120000円	
東京都	孤島妙真	100000円	

埼玉県	岸信一郎	30000円
京都府	志賀浄邦	30000円
大阪府	松浦克彦	30000円
山口県	岡本博子	20000円
岡山県	大岡千尋	14008円
足立昌源		10000円
埼玉県	石川上	10000円
東京都	遠藤善政	10000円
岡山県	亀井山俊光	10000円
大阪府	北田康晴	10000円
東京都	工藤真奈美	10000円
岡山県	小池悠貴衣	10000円
岡山県	小山美津江	10000円
兵庫県	杉浦嵩登	10000円
東京都	関根康正	10000円
広島県	滝川宗子	10000円
東京都	田坂正樹	10000円
岡山県	遠山睦子	10000円
東京都	並河正人	10000円
千葉県	成山昌夫	10000円
兵庫県	富士玄峰	10000円
岡山県	森下正志	10000円
岡山県	文殊院	10000円
埼玉県	和田千恵子	10000円
東京都	渡辺典子	10000円
東京都	吉野和	6000円
岡山県	赤木有子	5000円
広島県	浅村英子	5000円
東京都	伊神玉蓮	5000円
埼玉県	市川恒雄	5000円

福島県	市川るり子	5000円
福島県	市川美穂	5000円
東京都	今村美津子	5000円
岡山県	太田誠行	5000円
静岡県	岸山あき恵	5000円
東京都	桑野喜代	5000円
大阪府	斉藤彰裕	5000円
兵庫県	佐伯生子	5000円
岡山県	坂田暢子	5000円
兵庫県	高田厚信	5000円
岐阜県	中村寛	5000円
北海道	成沢豊	5000円
東京都	前田邦博	5000円
静岡県	山崎慈耕	5000円
愛知県	吉村拓三	5000円
大阪府	上杉紀勝	3000円
大阪府	豊下康裕	3000円
福岡県	野口恭博	2000円
岡山県	山根日出紀	1000円
第一次集約		3664008円

※「裁判費用援助」としてご支援いただいた方のお名前を掲載しております。この他南天会支援金からも裁判費用の援助を行います。

※次回公判は9月24日開廷の予定です。

裁判情報には以下の通りです。

インド最高裁 市民法廷書面告訴

2012年 訴訟番号380

南天会のご周知・宣伝にご協力ください

お陰様で入会者数は増えてきておりますが、支援の輪はまだまだ広げていかなければなりません。パンフレットなど必要な方は事務局までお知らせ下さい。PDF版は南天会ホームページ「南天会について」よりダウンロードできますので、各自印刷の上ご利用下さい。

【お願い】

1. インド政府、ビハール州政府、ブツダガヤ寺院管理委員会に申し入れ等を行ってください。それぞれ所属される宗派、本山、組織にてこの問題について協議し、インド当局が平和的決断を以て返還を実施するようアピールをお願いいたします。運動資料、経過説明、申し入れ文案等、南天会から提供いたします。

2. 裁判費用をご援助ください。

ゆうちょ銀行払い込み専用口座

番号 01380 090164

口座名 南天会

※「大菩提寺裁判費用援助」と明記ください。

※支援者の方には、南天会会報「龍族」にお名前を記載し、裁判経過および返還運動の状況を報告いたします。

南天会会計報告(2018 年 4 月 1 日～8 月 31 日)

収入の部		
適用		金額
前期繰越金		273882
会費・支援金		1735500
大菩提寺裁判費用援助		1642328
書籍販売		109320
講演入場料・募金		115663
合計		3876693
支出の部		
項目	詳細	金額
交通費	上人来日・台湾航空券	295240
	隨身者交通費援助	63760
	亀井インド渡航費援助	139250
	台湾同行者交通費宿泊費援助	100599
	国内鉄道利用	194650
	国内タクシー利用	62660
	国内車利用（ガソリン代・高速代）	14824
宿泊費	台北（2 名 3 泊）	19011
	福岡（2 名）	11800
	京都（2 名 2 泊）	28000
	福島（3 名）	18960
	成田（2 名）	11960
催行費	交流会会場御礼（5/27 真成院）	10000
	台湾上映会準備費用	30000
	台湾映像データ変換	31320
	京都会場使用料・備品使用料	55820
	京都登壇者交通費（3 名）	30000
	販売書籍購入	234828
通信費	龍族 12 号発送	37800
	来日案内発送	25370
	国内郵送料（本・チラシ・資料等）	19476
	海外郵送料（本・資料等）	32845
	手数料（振込受払・国際送金）	9594
印刷費	南天会角 2 封筒	33800
	京都講演チラシ印刷	1775
	ブッダガヤ大菩提寺返還運動パンフレット	15455
	大菩提寺裁判支援返信はがき	3200
その他	食事代	35995
	上人購入品費（本・薬・土産等）	59643
合計		1627635
繰越金		2249058

2018 年来日支援金寄付者御芳名
愛ニャンコ植田 赤木宥子 赤坂隆証
阿形国明 朝倉誠 天人純 飯島健一
石垣利明 石川上 伊藤友人 今村健太郎・桜
今村美津子 漆間宣隆江幡誠 遠藤貴則
遠藤喜政 大岡千尋 大橋裕 大山隆玄
岡本佳子 奥平心月 織田隆深 小野重徳
甲斐三晴 柏内敏子 加藤雅也（株）サンガ
岸信一郎 北川伸次 工藤真奈美 窪寺伸浩
倉吉妙承 黒澤雄太 黒澤隆治 小池一郎
小泉健太郎 河野太通 小寺信雄 酒井由美子
坂田龍晴 佐野明天 澤登拓 志賀浄邦
穴戸末美 柴田浩平 嶋崎実 嶋村可奈
下村恵美 白井昌子 進藤和美 進藤千鶴子
新内秀一 関口昌子 添田隆昭 高田孝子
高橋正子 高山龍智 武田英敬 竹原路晴
竹本泰広 武山博子 田中徳雲 田中則子
田中秀康 長命密寺 手嶋美由紀 手塚龍天
土居奈生子 遠山睦子 土岐信子 長瀬拓磨
中原永昌 成田山新勝寺 日本武徳院
長谷川敬二 原田正道 平原正雄 平原美智子
福瀬くに子 富士玄峰 藤原博元 古屋由美子
文屋晋和 保田知美 前田邦博 前田卓幸
宮浦千恵 宮淵泰存宮本千鶴子 宮本龍勝
妙光寺 森井伸幸 森田大乘 山口いずみ
山本宗補 遊亀山真照 吉村拓三 和田美也子
※50 音順 敬称略

会計外支援 ※敬称略
（随行者）位田龍樹 小林三旅 佐伯隆快
（帰国同行）古永尚子
（宿泊提供）
東京：真成院 遠藤一喜
山梨：内船寺 岡山：長泉寺
新見：遠山龍桜 神石郡：長命密寺
尾道：竹本泰広 呉：今村健太郎・櫻
台湾花蓮：珣光民宿（沈静香 沈輝泰）
倉敷：佐伯隆快 大阪：竹本泰広
（会場提供）真成院 浄泉寺 台北市文化局
（交流会茶菓）関口昌子
（台湾滞在援助）黄榮墩 翁純敏
（台湾映像翻訳）陳蕙如 李道道 温雅淳
（大菩提寺裁判資料翻訳）中村龍海

※大菩提寺裁判費用援助は、南天会への入金分のみ掲載しております。後日、南天会支援金の一部と合わせて、インドへ送金いたします。
※支援金・募金等で、直接佐々井上人に寄付された方の金額は含まれておりません。お名前は、確認できる範囲で掲載させていただきました。

この他、各訪問先での食事、車の提供等、たくさんの方々のご援助ご協力をいただきました。また南天会世話人の方々には、各地講演会をはじめ交流会、対談などで、多くのご協力をいただきました。皆様のお名前を掲載できませんが、この誌面をお借りして御礼を申し上げます。

あたたかいご支援まことにありがとうございました！

◆南天会現況 (平成三十年八月現在)

正式会員数 203 名

賛同人 (五十音順・敬称略)

漆間宣隆 (浄土宗浄土院住職・前岡山県佛教会会長)

奥平心月 (釣月庵庵主)

織田隆深 (高野山真言宗真成院住職・密門会会長)

小野重徳 (仏国土の会会長)

黒澤雄太 (剣士・日本武徳院師範)

小池一郎 (株式会社マクシス・シントー常務取締役)

島影 透 (株式会社サンガ社長)

高山龍智 (佐々井上人お弟子)

土屋信裕 (顕本法華宗弘通所法華行者の会主宰)

富士玄峰 (臨済宗・元ナグプール同友会世話人)

宮淵泰存 (日蓮宗妙光寺住職・長野県修法師会会長)

宮本光研 (真言宗御室派元執行)

宮本龍勝 (佐々井上人お弟子)

山本宗補 (フォトジャーナリスト)

※賛同人について

当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人とし、お名前を公表させて頂いております。

賛同頂ける方は是非お申し出ください。

※世話人について

南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人とし、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽に参加ください。

●交流会のお知らせ (東京)

* 9月30日 (日) 午後4時〜6時

今年のバンテージ一時帰国&台湾訪問報告を行います。また、ブッダガヤ大菩提寺管理権返還運動について、今後の南天会について皆さんで話し合います。一時帰国中のお弟子亀井竜亀さんも参加します。参加無料、予約不要です。

場所・株式会社フレアス

〒151-0061

東京都渋谷区初台2-5-8

西新宿豊国ビル2F

☎ 03-6632-9210

●バンテージ専用車を

寄贈いただきました!

龍族12号で募集いたしましたお坊さん方を乗せる車の寄贈について、名古屋の前田卓幸様から寄贈のお申し出をいただき、無事納車完了しました。佐々井上人もブッダガヤ奪還に向けてこの車でインド中を駆け

巡ると言って意気込んでおられます。前田様、この度は誠に有難うございました。



※車には前田様のご親族のお名前が記載されました。

ご支援・
会費について

【会員種類と年会費】

支援会員 10,000円 (会費+支援金) / 年

一般会員 5,000円 / 年

学生会員 2,000円 / 年 (※大学生まで)

その他の特別支援も、時期・金額問わず受け付けております。

《各種お振込先》

【金融機関名】 ゆうちょ銀行

【口座番号】 01380-0-90164

【加入者名】 南天会

同封の振込用紙、または郵便局備え付けの払込取扱票にてお振込下さい。なお、ご入会を希望せずご支援のみの方は、通信欄に「入会不要」とご記入下さい。

(南天会事務局)

〒710-0004

岡山県倉敷市西坂 1582-1 一心念誦堂内

TEL/FAX 086-463-9391

佐伯隆快 (090-5304-8955)

小林三旅 (090-4538-2677)

メール nantenkai@gmail.com

URL http://www.nantenkai.org/

最新情報は
Facebook『佐々井秀嶺資料室』
をご確認ください。

